ろいやる！！

陸 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ろいやる！！

【Ｎコード】
Ｎ５１８４Ｋ

【作者名】
陸　要

【あらすじ】
魔術の最高研究機関である王立魔術協会で繰り広げる主人公平塚百目とその仲間たちの日常。並み居る奇人・変人に打ち勝って、百目は立派な研究員になれるのか！！
ドタバタファンタジー学園モノ！！・・・・・・・・・・・・・・・かも。

プロローグ（前書き）

ジャンル「ファンタジー」としておきながら、作者が一番その定義に自信がありません。ごめんなさい。
あと、初めての投稿で何かと読み辛いところもあると思いますがご容赦下さい。

プロローグ

魔術の存在する世界が在った。
精霊、妖精、妖怪に怪異、そんな幻想と人が同居する世界。
それらが時代の流れに埋没しそうなって、それでも失われなかった世界。

この物語はそんな世界の片隅で日々を悲喜交々と送る者達の物語。

その日、平塚百目は出立の準備に追われていた。
彼は数日後に控えた海外留学の為に、ほとんど引越しでもするかのよに部屋中の物を荷造りしている。
しかし百目の頭の中では荷物の算段をつけると共に、未だ見たことも無い遠い異国の地に思いをはせていた。

―アヴァル王国―
それが百目の留学する国だ。
この世界における五大陸の内最も大きな大陸ジェノス。その中でも古くから世界の中心と言われてきたルーン地方の北西に浮かぶ島国。今でこそ小さな島に収まっているが、かつてはルーンの大半を領地とし、現在でも世界中の国々に強い発言力を持つ強国にして、大老国と呼ばれている。
そして、この国に存在するのが現存する世界最古の魔術学会、王立（ロイヤル）魔術協会（ソサエティー）。
数百年前、科学技術の発展や産業革命等により、この世界から失わ

れようとしていた魔術をどの国よりも早く国家を挙げて保護する為に設立され、以来世界最高の魔術研究機関となっている。
百目が念願叶って留学を許され、魔術を学ぶ事になる場所。

そんな事を考えながら作業をしている為か、傍目にも百目の作業は遅い。
「いかん、いかん」と思い作業を再開するが、また直ぐにニヘラっと締まりの無い顔になってしまう。
そんなこんなを繰り返しながら、百目の旅立ちまでの日常は過ぎていく。

百目とは対照的に姫城沙綺の準備は大方完了していた。
そもそも持って行く物が極端に少ないのだ。何より足りなければ向こうでそろえれば良い。
その辺は幼馴染みの百目とは反対にサッパリとした彼女の性格が出ている。
特にする事も無く手持ち無沙汰気味に部屋を見回していると、机の上に置いてある写真立てで視線が止まった。
中には入学式の写真だろうか、満開の桜の中笑っている百目と無表情な沙綺の二人が写っている。
沙綺にとっては色々と思い出深い一枚なのだが、恐らくこの馬鹿みたいに笑っている幼馴染みは何とも思っていないだろう。
本当に腹立たしい。こっちがどんな思いでこの写真に写っている時から留学に付いて行く事を決意したと思っているのか。

「本当に！？うれしいなあ！！向こうで、知り合いが居ないのはさびしいからね」

なんて平然の如く抜かしやがった。今思い出してもフツフツと怒りが湧いてくる。
・・・・・・まあ、嬉しいといった事に関してだけは吝かでもないが。

明日は百目の家に行こう。どうせ荷造りもまだ終わってないだろうから手伝ってやろう。
そんな事を考えながら床に入った沙綺の意識は眠りの中に落ちていく。

それぞれがそれぞれの過ごし方で日々は過ぎていく。

この先の未来に何が訪れるか知らず、知ろうともせず。

百目はただ夢と希望に満ち溢れ。

沙綺は胸に秘めた大きな野望に燃え。

そして、出国の日は訪れる。

プロローグ（後書き）

ここまで目を通していただき、ありがとうございます。
ご指摘やご感想をいただければ、作者が狂喜乱舞します。
次回もより一層頑張りたいと思いますので、気長な目で見ていただけると嬉しいです。

第1話　お約束は漂着から前編（前書き）

相変わらずファンタジーのファの字もありません。どころか未だに主人公が協会に着く気配すら見えない今日この頃。
気長に待っていただけると幸いです。

第1話　お約束は漂着から前編

――――海

そう言われたら、人はどんな事を思い浮かべるだろうか。
海水浴、釣り、はたまた船に乗った記憶か。

多くの人は海を恐れない。特に内陸部に住む人間にとって海は漠然とし過ぎていて恐怖の対象にならない。
精々が遊びに行ったくらいの思いしかないだろう。

しかし、海は確実に人へ牙を向く。
潜れば周囲から掛かる水圧。
水温によって奪われる人間の体温。
何より足も付かない様な外海に何の装備も浮きも無しで人が居れば、いずれ力尽き沈んでしまう。

何が言いたいのかというと。

――――教訓：海で遊ぶ際は、十分に注意しましょう。

「誰が今、教訓話を求めたよ！！」

・・・・・・このモノローグにいきなりツッコミを放った青年は平塚百目。
現在絶賛遭難中だ。

海の真っ只中で。

百目は悪態を吐きながら、何とか浮かんでいようと足掻いているが、如何せん波は荒く空を曇天が覆っている。
どう控えめに見ても嵐の最中だ。
そうこうしている間に一際大きな波が被さると、百目は二度と見えなくなった。

さて、主人公が一時退場した所で少し舞台となっている国について説明をしよう。
現在関係各局が血眼になって百目を捜索しているのがアヴァル王国。
百目の留学先である　王立魔術協会（ロイヤルソサエティー）が在る。

一方アヴァル王国の在るルーン地方から見て遥か東、ジェノス大陸の極東に存在する島国、八ツ島国。
名前の通り大きく別けて八つの島々からなる国家で、国土の狭さと鎖国と呼ばれる国交断絶を行っていた為に、かなり独特の魔術体系が作られた国だ。
現在は開国し、世界各国とも国交を持ち、アヴァル王国とも同盟関係にある。
因みに余談ながら歴史上、幾度となく人と人外の戦が起こっている

にも拘らず、世界でも唯一と言える人妖平等（ルーン風には人魔平等か）を政道に謳っている非常に珍しい国家だ。

お互いにお互いの技術を求め合った結果、両国は頻繁に留学生を派遣し合い知識や技術の吸収に務めた。
今回もその一環で百目と沙綺の留学が決まり、八ツ島からアヴァルへ向かったわけだが・・・・・・。

船は途中嵐に遭い、乗客一名が行方不明。
それがよりにもよって八ツ島からの派遣留学生。
ぶっちゃけた話百目である。
王室と議会は即座に割けるだけの兵を捜索に回した。

――――――とてもじゃないが落ち着いてなんて居られない。
無事に入国し協会入りを果たした沙綺はこれから自分が暮らす事になる部屋の中でイライラとしていた。
逆にイライラしていないと、今にも泣き崩れてしまいそうな自分を叱咤している。こういう時の想像は何故か考えたくない悪い方へ悪い方へ行ってしまうのが常だ。一説には人間に備わっている精神防衛の一種らしいが、今の沙綺にそんな事は関係ない。

「・・・・・・あの馬鹿。・・・・・・・いつも側に居て守るって言ったくせに・・・・・・」

普段の冷静かつ気丈な態度からは想像出来ない様なか細い声で呟く。その声はまるで泣くのを必死に堪えている幼子の声にも聞こえた。

待つのももう限界に近かった。元々沙綺は待つのがそれほど得意でもないのだ。

こうなれば一人でも百目を探しに良く決意を固めたその時、不意に扉をノックする音が聞こえる。

何とか気を取り直し、目元を拭ってドアに向かった。

「はい。誰でしょうか？」

「あア、協会の者でス。少々お話を良いですカ？」

男性の声なのだろうが、どことなくイントネーションがずれていると言うか、間延びしているというかそんな声をいぶかしみながらも沙綺は扉を開けて、その男と対面した。

一方その頃。

ふと気を取り戻した百目はぼんやりした頭で何とか現状把握に努めようとしていた。

（・・・・・・ここは何処だ？・・・・・・・固い場所に寝転がっている。海じゃない、陸地には居るのか？）

段々と視界も晴れて来る。どうやら潮で目をやられている様子もなさそうでホッとした。
次は何とか体を起こそうとして動いてみると、今度はほとんど体を動かす事が出来なかった。

（しまった。体はどこか傷めたのか？）

体が全く動かないことから最悪の想像をして、やっとの事で重たい頭を少しだけ動かして体を見てみると。

見事に縛られていた。
しかも後ろ手菱形縛りで。

（何だ、ただの緊縛プレイか・・・・・・。）

「ってそんな訳無いだろ！？なんじゃこりゃ！！！」

そう思いながらも何処かで「あっ、声は出るんだ」等と考えていた

りと、百目の頭の中は混乱を極めていた。
何で助かったと思ったら縛られているのか。それも非常にマニアックな縛り方で。
まあ、もっともこの縛り方を知っている時点で百目の知識も非常にマニアックなのだが、今現在それにツッコミを入れれる人間はここには居ない。

「落ち着け。落ち着くんだ。こういう時は焦っても活路は見出せないと師匠も言っていた！！」

何とか自分を落ち着かせ、現状の把握に努めようとする。

「そうだ、混乱している時は東海道五十三次を逆から唱えるんだ。京都・大津・石部・・・・・・・良し！落ち着いた」

未だ嘗て聞いた事もない方法だったが本人は落ち着けたらしい。

取り合えず自分は今まで経験した事の無いような縛られ方で転がされている。
次にここは何処なのか？暗くはあるが、目が慣れてきたせいかぼんやりと見えてきた。どうやら部屋らしいのだが、窓の類は一切く、ドアらしき場所から若干光が漏れて見えるぐらいだ。それもどうやら日の光の類ではなさそうだ。
という事は夜なのか、はたまたそれほど奥まった部屋なのか。
部屋には自分が転がされているだけで、家具の類も全く無い。

まだ情報は無いか考えていると、外に人の気配がした。気配はそのまま部屋に入ってくると明かりを灯し、百目の前に立った。
中肉中背とでも言うのだろうか。八ツ島人の百目からすれば幾分大柄だが、筋肉が付いてるとかそう言う訳でもなく、ひょろりとして

いる訳でもなかった。人種は解りやすいルーン地方特有の白色人種。流石に八ツ島出身の百目に国までは特定できなかったが。歳は正直良く解らない。予想では四、五十かとも思うが、自信は無かった。

「気が付いたかね？」

顔の皺の分だけ重みを重ねたような声が男の口から発せられた。

「ここは何処だ？何で俺は縛られている！？」

「ここはアヴァル王国フィアッカ地方に在る海沿いの町シール。そこにある私の屋敷だ」

取り合えずアヴァル王国には着けたらしい。しかもフィアッカ地方は最終目的地の王都と協会が在る地方だ。このシールという町からどれ位離れているのかは解らないが、違う国に流れ着かなかっただけ僥倖と言える。

百目が一人でそう納得していると、男は百目のもう一つの質問にも律儀に答えてきた。

「そして、君を縛っているのは君に逃げられないためだ」

「いや、意味が今一つ解らないんですけど？」

理解が及ばなかったのか、理解したくなかったのか、思わず百目は丁寧に聞き返した。

「ふむ、では単刀直入に言おう。君が気に入ったので側に侍らして置こうと思ってな」

・・・・・・今度こそ百目の思考は完全にストップした。

第1話　お約束は漂着から前編（後書き）

主人公が協会に着くどころか、後編に続きます。
一応次の話で協会入りして本格的に勉強が開始します・・・・・・
すると良いな？
ご意見、ご感想お待ちしてます。
どんな些細なことでも結構ですので、頂けるとうれしくて作者のやる気も出ます。
どうぞ宜しく御願いします。

第2話　お約束は漂着から後編

「・・・・・・はい？」

何とかフリーズした思考から解放された俺の口から出た言葉はそれが限界だった。
だって、海で遭難したと思って気がついたら縛られていて、挙句見知らぬおっさんに側に侍らすだの何だの。
これで正常に思考が働く人間が居たら是非とも紹介して頂きたい。

しかし、混乱していたところで事態が進展するわけでもない。
オーケイ、先ずは事態を整理しよう。

1、ここは見知らぬ何処か
2、俺、縛られている
3、目の前には知らないおっさん

プラス良く解らない事をほざいていた気がする。もしかして俺の言語能力不足だろうか？

「すまないが、俺の言葉は通じているだろうか？」

「心配せずとも、通じている。それどころか八ツ島人にしては、非常に流暢だ」

どうやら言葉は通じている。

おまけにこちらが八ツ島人だという事にも気が付いているらしい。
更に混乱を極めていると向こうから話し出した。

「今君は私の発言が解っていない様だな。先ずはそこから説明しよう」

頼むからそうしてくれ。こっちはもう頭がパンクしそうだ。
おっさんはまるで遠くを見るように語りだした。

「私は黒髪黒瞳が大好きなのだよ」

・・・・・・真剣な顔でどうでも良い事を言っていた。
呆れて物が言えないとはこの事だろうが、おっさんの独白は続いていく。

「特にそう！！八ツ島人は堪らない！！」
「黒髪黒瞳は然る事ながら、華奢な体付きと従順な気質！！何もかもが私の好みだ！！！」

どうしよう？
何だか泣きたくなって来た。
しかし、これは解決の糸口に成るんじゃないか？
このおっさんは勘違いしている。それを指摘してやれば、この状況を打開できるかも。

「あのな、・・・・・・一つ勘違いしているようだが、俺は男だ！！」

「そんな事は知っている。私は男の子が堪らなく愛おしいのだ！！！」

・・・・・ああ、そうか。このおっさんは勘違いしているんじゃない。解った上で俺を監禁しているんだ。

これは無理ですよ？

どう考えたってもう次元が違いすぎるもん。

あはははは、異文化コミュニケーション！！異文化コミュニケーション！！

アヴァルにも衆道ってあるんだな～♪

あは、あはははははははあは～♪

もう俺の思考は遥か遠くに渡っていた。

だってさ、自分で言うのもなんだが普通主人公が漂着とかしたら、ヒロインとかに助けられるもんじゃねえ？

そんでゆくゆくは良い仲になるとか、そう言う物じゃねえの？

赤毛の冒険者なんて毎回そうだよ。「遭難が趣味なんですか？」って聞きたくなるレベルだよ。そんで毎回美少女に助けられて。

なに？衆道趣味の異国のおっさんとか？
誰が喜ぶんだよ！？

あまりの出来事に混乱且つ、良く解らない電波を受信してしまった。何だ主人公って。
しかし相手は待ってくれない。おっさんの方で動く気配が在った。
警戒しておっさんが居た方を見ると・・・・・・。

目の前の事態に俺は目を剥いて固まるしかない。
そこにおっさんは居なかった。
いや厳密な意味では同一人物だが、既にそれは先程まで話していたおっさんではない。

そう彼の者は人の世に在る戒めより解き放たれた者。
人が恩恵を受ける為に敢えて甘受した運命に叛逆する者。
人が科せられた古より続く束縛から真の自由を勝ち取った者。
己の意思で戦いに赴き、悪と言われ様と覚悟を糧に進み続ける者。
汝その名は・・・！！！

そう、そこには！！・・・・・・・・・・・・そこには、一人の全裸が居た。

「ひいいいいいいいいっ！？」

訳が解らなかった。

「なんで！？なんで、服を脱いだ！！何故全裸なんだ！？」

俺の叫びが心底不思議だったのか、おっさんから全裸に昇格（？）した男は怪訝そうな顔になった。

「何を言っている？・・・・・・まさか、君は服を着たままスルのが好きなのか？」
「それはいけない。愛し合うもの同士、神の御前で己を偽る事無く、在りのままを晒さなければ！！」
「ツッコミ所が多すぎんぞ！？先ず愛し合ってねえ！！」

すると、先程まで全く表情を変えなかった全裸が初めてニヤリっと笑った。
駄目だ！！絶対あれろくな事考えてない目だ！！

「問題ない。私と一つになれば直に気持ちは変わってくる」

はい、正解！！ろくな事じゃありませんでしたー！！！！
そんな百目に構わず全裸はゆっくりと近付いてくる。
また、微妙に大きいのだ。いわゆる股間のゾウさんが。しかも全裸の歩みに合わせてユラユラしている。
もう百目は恥も外聞無く涙目になっていた。
縛られてさえいなければどうにか出来たかもしれないが、今は手の一つすら動かせない。

（嫌だ。死ぬ思いでやっと着いた遠い異国の地で男との合体なんて死んでも御免だ！！！）

それが起こったのは、遂に全裸の手が百目に届き、百目が思わず目を閉じた瞬間だった。
どう形容して良いのか。決して耳あたりの良い音とは言えない、無理矢理に木造家屋を押し潰したかの様な轟音が響き渡り、部屋の半分が無くなっていた。
無くなった部屋の向こうには、外の風景と空が青々と広がっており、視界には薙ぎ倒されたであろう屋敷の残骸が一面に広がっている。

消えた部屋の代わりに、そこには一人の男が立っていた。
一見して年齢までは解らないが、外見的特徴としては百目と人種的に似ていた。
恐らくは八ツ島人だ。

しかし、百目と全裸が唖然としているのは、そんな事が理由ではない。
明らかに他のパーツが異様過ぎるのだ。

ヒョロリとした体には白衣を纏っているが、所々ドス黒く汚れ、顔の半分を覆い隠さんばかりの髪の奥からはランランとした目が覗く。口までは髪も届いていないが、三日月の様にニタァと開かれ、中は血の様に赤くテラテラとしている。極め付けは見た事も無い剣が、金属同士を擦り合せる様なキィィィというけたたましい音を立てながら両手に握られていた。まるでチェーンソーをそのまま剣のサイズまで細くした様な代物だ。
このまま月明かりの下に佇むか、夜中の街角にでも立っていれば立派なホラー映画が出来上がるだろう。

あまりの出来事に百目と全裸が絶句していると。

「キミが、平塚百目君かイ」

「あっ、はい、そうです」

どこか、イントネーションが狂った様な言葉だったが、異様な事態に思わず敬語で答えてしまった。

同様に全裸もどうしていいのか解らず、固まっていた。

「この発明は成功だネェ。特定人物の魔力波長を登録する事で探知・追跡すル。ヤンデレ御用達『人物追跡スカウター』！！！」

ネーミングセンスが壊滅的なストップウォッチがどうにかなった物を握り締め興奮する男を眺めながら、「ああ、この人間違いない八ツ島人だ」（最も八ツ島にヤンデレという概念が、それ以前にこの世界に存在するかは謎である）そんな事を呆然としたまま百目が考えていると。

「早速、帰ってレポートに記さなけれバ！！」

男はそう言うといそいそと退場して行こうとした。

百目も全裸も呆然としていたが、先に我に帰ったのは百目だった。

「ちょ、ちょっと待って。この状況見て何も思わんのかい！！てか、

助けてください！！！」

「ムン～。そう言えバ、キミは何故縛られているんだイ～。まさカ！！そういうプレイィィィィィィィ。イヒヒヒヒヒ、若いのニ何て倒錯的なんだイィィィ。流石のボクもソッチの趣味は無いからネェェェェ！！！！！」

「そんな訳無いだろ！犯されそうになってんだよ！！」

「でモ、急いでレポートを書きたいからネェ。今度機会が在ったら助けるヨ～」

こんな機会がそう何度も在ってたまるか！！！と百目が叫ぼうとした瞬間、男はいきなりあらぬ方向を見上げ、真面目な顔で八ツ島語を喋った。

「それジャ沙綺君、後は宜しク」

それだけ言うと、男は奇怪な笑い声を上げながら本当に帰って行った。

その時点でやっと全裸も思考が戻ったのか。

「さ、さあ、邪魔者は居なくなった。私と今こそ一つになろう！！」

しかし百目にとってはそれどころじゃない。

全裸は流石に八ツ島語までは理解出来なかったらしく、先ほどの男の置き台詞を理解出来たのはこの場で百目だけだった。いや理解してしまった。そしてその理解が正しければ、もう少ししたらこの場は文字通り「地獄」と化す。

「・・・・・・逃げ・・・・」

「えっ？」

「良いから逃げろ。早くこの場から逃げろ、おっさん！！！」

「何を馬・・・・」

そこまで言った所で、全裸が目の前から消えた。
いや正確には吹き飛んだ。良く見れば痙攣する全裸が屋敷の残骸の間に転がっている。
百目はガタガタと震えながら何とか体を動かし後ろに目をやり、そして悲鳴を上げた。

———鬼だ。
そこには、鬼が立っていた。
まるで鮮血の様な瞳と髪。その長い髪は魔力の過剰放出によりユラユラと揺れている。その様はさながら燃え盛る業火にも見える。
そしてその額には鬼の証———角が二本生えていた。
顔や体型などを見る限り、その鬼は女性体なのだろう。外見上の体付きは細く、もっと言ってしまえば華奢にすら見える。

しかし、百目は知っている。その細い体に秘められた人外の力を。恐らく先ほど部屋を強引に薙ぎ倒したのも彼女の仕業だ。彼女こそ、百目と同じく八ツ島から遥々、アヴァル王国まで共に派遣されてきた留学生、姫城沙綺だ。

この通り人間ではない。沙綺は八ツ島で人の次に数が多い種族、鬼族だ。それも二種類居る内の角が二本在る双角鬼。鬼族は家の格式は単純な一族の強さで決まるが、姫城家は双角鬼のトップに立つ。つまり、沙綺はお姫様にして鬼族ではほとんど最強と言っても過言ではない。

人間の百目と鬼族の沙綺がどの様な付き合いが在って幼馴染みに成ったのかは、また何れ語るとして。

逃げ出したい。それも切実に。

正直つい今しがたよりもビビッている自信がある。

間違い無くこの幼馴染みはキレている上に、そのとばっちりはこっちに来る。

だが、今現在百目は縛られている為動く事もままならない。

百目は覚悟を決め歯を食いしばり、ぎゅっと目を瞑った。

「・・・・・・探したぞ」

しかし、百目の予想に反してその口（若干牙が見える）から発せられた言葉は冷静で、それと共に魔力の過剰放出も止まり外見にも変化が生じ始めた。

徐々に髪の毛や瞳の色が元の黒色に戻り、角も短くなっていき遂には見えなくなった。

「心配したんだ。本当に。何度も、何度も、もう・・・・・・駄目かと・・・思って」

縄を解きながら途切れ途切れ喋っていた沙綺はぽろぽろと子供の様に泣いて、百目の顔を濡らした。

不思議だが先程までの恐怖は無くなり、代わりに罪悪感が百目に圧し掛かった。

昔からこの幼馴染みの涙には弱いのだ。どんな無茶な頼み事でも、百目が断り続けて最後には沙綺が泣いて結局は百目が折れて沙綺の頼み事を聞いてしまう。そんな事を自分たちは一体何回繰り返してきただろうか。

「ごめん、沙綺」

「あやまるな、ばかぁ」

とうとう我慢出来なくなったらしく、沙綺は縄が解けた百目にしがみ付き泣きじゃくった。百目は半分廃墟と化した部屋の中、やっと自由になった手で沙綺の頭を撫でたり、背中をポンポンと叩いたりしてあやす羽目になった。

事の顛末だけ報告しようと思う。

結局あの後、王国軍が駆け付けるまで沙綺をあやしとく羽目になった。

他人に泣いている所を見られた沙綺が逆上して惨劇が繰り広げられたのだが、それは正直忘れたい。何故かって？一番被害を被ったのはそこら辺に転がっていた全裸でも王国軍でもない。他でもない、俺だったのさ・・・・・・。

そして全裸は逮捕の上、連行されたがどうでも良い。本当にどうでも良い。最後の最後まで「愛してる！！」とか「再び見えよう！！」とか聞こえた気がするが、気のせいだ。気のせいだったら気のせいだ！！

俺はと言うとやっと入国手続きを終え、協会入りを果たした。

まだ何もやっていないのに何だか途方も無く疲れた。もう故郷が恋しくなるレベルだ。

自分に宛がわれた部屋のベッドに沈みながら、願わくはこれからの生活は平穏でありますと様にと祈りながら俺は眠りに落ちた。

しかし、当然の事ながら平穏無事な生活など訪れる訳が無い。

寧ろ彼を中心に更なる混沌と狂乱が巻き起こるのだが、それはまた次のお話。

第2話　お約束は漂着から後編（後書き）

まずはここまで読んで頂き誠にありがとうございます。
今回は如何だったでしょうか？
作者としては何だかやたらと全裸、全裸と書きまくった気がします
（汗）

ご意見・ご感想をお待ちしています。
是非とも声をお聞かせ下さい。

第3話　元から無い平穏なんて望んだところでやっぱり無い前編

入国時の騒動が在ってから早数週間。ようやく協会にも慣れ、知り合いも出来た百目は自分の部屋で朝の準備に追われていた。

協会に行く時間まで余裕が幾らか在るが、幼馴染みが朝食を食べに来るからである。幼馴染みとは当然沙綺の事だが、彼女は百目と同じアパート（と言うよりも協会の寮に近い）の隣部屋に住んでいた。沙綺の父親、要は双角鬼を纏め上げる姫城家の御当主様だが、彼は散々二人で同じ部屋を借りる様に勧めてきたが、百目がそれだけは何としてでも阻止しようとして成功したので、最後の妥協案として隣同士となっている。

アパートは協会から少し離れた場所に在り、のんびり歩けば15分位かかる。部屋の作りは簡単で、キッチンと扉一枚挟んで部屋が一個あるだけの簡単な物だ。沙綺の部屋も同じ作りだろうが百目はまだ訪れた事は無い。

沙綺は何故か朝食を食べに毎朝やって来るので百目としても気が抜けない。本当は朝ぐらい手を抜いて簡単に済ませたいのが百目の本心だが、沙綺曰く、「どうせ一緒に協会に行くんだから、朝も一緒の方が良いんだ」と解る様な、解らない様な理由を並べ立てていた。まあ結局の所百目と一緒に朝食を取りたいだけなのだろう。

これで沙綺が素直に言うなり、百目がもう少しこう言った方面に聡ければ結果も変わったかも知れない。しかし、現状は沙綺にとってこれが精一杯の努力だった。因みに百目は期待するだけ無駄だ。

「少し、何時もより遅いな……」

朝食の準備も済み、一段落した百目は呟いた。毎日同じ時間にきっちりと現れる沙綺がまだ来ない。何時もなら既に部屋の中で寛ぎながら、百目を急かすのが常なのだが。

百目は気になり隣の部屋に行こうとし、ドアのノブを握ろうとした。

しかし、その瞬間バキッと音が鳴り握ろうとしていたノブはドアの向こう側へと消え去った。

あまりの事態に唖然としていた百目だが、今度は扉が激しく叩かれだした。咄嗟に身を捻って回避したら百目の体の在った場所をドアが凄まじい勢いで飛んでいき、更には窓の割れる音と外から通行人の悲鳴が聞こえてきたが取り敢えず無視した。

何故ならそこには顔を真っ赤にした沙綺が息も絶え絶えに立って居た。

「……すまん。遅くなった」

「いや…、それは良いんだが……。何故朝から破壊活動に勤しんでるいんだドアとノブに何か怨みでも？」

「……そんな訳無いだろう。少し力の加減を間違えた」

沙綺は少しイラついた様に呟いた。

一体どんな風に加減を間違えばドアが部屋を過ぎ去り、表通りまで吹き飛ぶのか。

しかし、百目はそれよりも沙綺の髪が気になった。何時もなら黒い髪が赤みを帯びている。それも前に廃墟で見せた様に綺麗な真紅ではなく、斑状に所々が赤くなっている。

「沙綺、もしかして熱があるのか？」

確かに沙綺の顔は赤く上気している。瞳も潤んでいるし、息も少し荒い。何より百目には覚えがあった。以前も沙綺が風邪で熱を出し、普段抑えている鬼の力が抑えられず意思とは関係なく表面に出てきた事があった。その時も確か最初は今みたいに髪が斑に染まった。

「……違う。……と言いたいが、すまん。限界…」

そこまで言うと沙綺は百目の方へ倒れこんで来た。慌てて百目が受け止めると驚くほどその体は熱くなっていた。

百目が何とか沙綺を部屋まで運び寝間着に着替えさせ熱を測って見たら３９度６分もあった。誰が見ても微熱なんてレベルではない。

「こんな熱で無理するなよ。何時からおかしかったんだ？」

「……」

「黙っていたら解らないだろ？何時から違和感があった？」

「……昨日の朝から」

「おま、馬鹿か！早く言えよ。何で言わなかったんだ！？」

「……迷惑掛けると思って」

そう言われると百目としても言い返し辛い。何より百目にとっては何時もの傲岸不遜とも言える沙綺がここまでしおらしいと調子が狂う。

「とにかく、今日は休め。俺も午前中までしかないから直ぐに帰ってくる」

「……行っちゃうの？」

百目は思わず「うぐっ」と唸った。そう彼の心に何かがクリーンヒットした。

しかし、百目としても協会を休んで沙綺を看病する訳にはいかない。それから何とか沙綺を説得して協会へ向かったが、朝からドッと疲れた百目だった。

百目が協会へと向かっていると途中で見知った顔と合流した。

「おはよう、ヒャクメ君」

「よう！いい朝だな、ヒャクメ」

「おはよう、二人とも」

最初に挨拶してきたのはガルシア＝ジェイマン。百目と同じく人間で歳は同じ位らしい。らしいと付けたのは、余りにも幼く見えるからだ。身長なんてルーン人に比べて小さい八ツ島人の百目より小さい。本人としてはそれもコンプレックスらしく、偶に周りからからかわれては怒っている。しかし元々大人し過ぎる位穏やかな性格と童顔な顔つきでぴょこぴょこと怒られても、全く怖くない。寧ろ小さな子供が背伸びをしている様で微笑ましくなってしまい、一部の人間はそれを解ってやっているのだが本人は知らない。

百目が最初のごたごたとアヴァルでは珍しい八ツ島人と言うことで浮いていた所に声を掛けて来てくれたのがこのガルシアだ。それ以来暇な時は大体沙綺とガルシアの3人で研究の話に花を咲かしている。

次に軽い調子で挨拶をしてきたのはレックス＝クラインフェルター。こちらは百目やガルシアとは違い人外で、任意で狼に変身する事の出来る人狼族の青年だ。かなりの女好きらしく、百目が居ない時に沙綺に粉を掛けようとして文字通り返り討ちに遭ったらしい。無論人狼族とて人間からすれば破格なほどの戦闘力を持つがそれでも沙綺に手も出せず沈められたらしい。

しかし、本人はそれすらも気に入ったらしく今でもデートの誘いをせっせと行っている。百目としてはその後の不機嫌になった沙綺の相手をしなければならないので勘弁して欲しいが、顔を合わせている内に何時の間にか話をするようになっていた。

「あれ、そう言えば今日はヒメシロさんどうしたの？姿が見えないけど」

ガルシアが気付いたようなので、今朝起こった事の顛末を二人に告げる。ドアが吹っ飛んだ辺りでガルシアの顔が青ざめていたが最後まで話し終わった。しかし、結局あの後ドアを回収しようとしたら通りで粉々に砕け散っていた。けが人が居なかった事だけを祈る。

すると黙っていたレックスが急に「ウオオオ！！」叫びだし百目とガルシアはびっくりした。

「なんだ！遂に頭の中までイカレたか？」

「違う！！」

「今この時にもサキが熱で苦しんでいるのに、お前は何ともないのか！？」

「沙綺だって子供じゃないんだ。騒ぎ立てるほどじゃないだろ」

実際は百目が出て行こうとすると「置いて行かないで」とか「一人は寂しいよぅ」とか泣きながら駄々をこねて来たのだが、沙綺の名誉の為に言わなかった。決して後の報復が怖かったからじゃない。

「解ってない！解ってない！！お前がそんな事言っているなら、俺が今から看病に行ってくるぜ！！！」

言うが早いか、レックスは駆け出そうとしている。ガルシアはそんな彼をどうやって止めようか、あわあわしている。
しかし百目は冷静に、しかし何処か呆れたように言い放った。

「別に看病するのはお前の勝手だが、死ぬなよ？」

瞬間走り出そうとしていたレックスはピタリと止まり、顔だけこっちに向けて来た。

「さっき説明しただろうが。今の沙綺は鬼の力を制御出来ていない。意識が朦朧としている状態で下手な事をすれば全力で向かってくるぞ？」

今度はレックスの顔色が真っ青になり、カタカタと震えだした。
もしかしたら沙綺に叩き潰された時の記憶がフラッシュバックしているのかも知れない。

「とにかく、馬鹿な事やっていると講義に間に合わないぞ」

百目とガルシアは震えながら「無理無理むりむりムリムリ……」と呟き続けるレックスを引っ張るようにして歩きながら、協会の講義棟へ向かった。

王立魔術協会には所謂教育機関が付属している。これは協会が設立された時に、時の女王が次代に続く後進の育成の為に作った制度だ。実績や知識の無い者を先ず学生という立場で教育し、その後に試験を受けマスターやドクターになる。余談ながら八ツ島ではそれぞれ修位と博位と呼ばれている。

そのドクターの中から各専門に8人まで協会の最高位たるプロフェッサーの椅子が用意されている訳だがこれはかなり狭き門で、毎年何人も挑むが一人も昇格出来ないのが当たり前の様になっている。また、プロフェッサーの席が満席の場合は当然資格を満たしていても昇格出来ない。

余りにも厳しすぎてプロフェッサーが2、3人しか居ない専門が殆どだ。

つまり百目達は今現在学生の立場で協会に出入りしている訳だ。だから厳密な意味では研究者ではない。自分の専門を研究するには最低でもマスターにならなくてはならない。更に研究室を持とうと思えばドクターでやっと何人か集まって申請すれば貰える合同研究室が与えられる。もっともそれも年間の活動実績が無ければあっと言う間に取り上げられてしまう。

個人の研究室と潤沢な研究費が与えられるのはプロフェッサーだけだ。

ガルシア達と別れて百目は1人講義室に向かう。何時もなら沙綺

も同じ講義なので一緒に行くのだが今日はそれが無い。
ふと、「寂しい」と思ったが頭を振る。

「……沙綺のがうつったかな？」

そう言いながら、講義室に入った百目だが相変わらずこれだけは慣れない。まるで珍しい物でも見るかの様な視線。好奇心と僅かな嘲りの混ざった目、目、目。
百目は溜息を吐きながら席に着くが、その周りは穴が開いたように誰も座っていない。誰もが遠巻きに見ながらヒソヒソと話し合っている。
何時もは大して気にならないのだが、今日は妙に周りの事が目に付いた。これも恐らく沙綺が居ないせいだろう。心の中で「……沙綺が居ないと寂しいな」と呟いてみる。恐らく本人が聞いたら「馬鹿」と言いながら内心大喜びしたであろう。

そんな風に百目が傍から見てボーっとしていたら、不意に周りが静かになった。疑問に思う間もなく百目は声を掛けられていた。

「隣の席は空いていますかしら？」

「あ、ああ」

見るとそこには金髪に碧眼を持った女性が微笑みながら立っていた。

第3話　元から無い平穏なんて望んだところでやっぱり無い前編（後書き）

お久しぶりです、もしくははじめまして！こんにちは、陸要です。
今回の更新はだいぶ遅くなってしまい、ごめんなさいm（＿＿）m
しかも、今回も後編へ続きます。
おかしい、構想では一話でけりを付ける積りだったのに……。

こんな作者ですが、どうぞ見捨てないで下さい。皆様のご意見ご感想を聞かせてください。それを活力にこれからもがんばります。

第４話　元から無い平穏なんて望んだところでやっぱり無い後編（前書き）

大変お久しぶりであります。
今回は少々何時もより長くなっておりますが、よければ是非最後まで御付き合いを。

第４話　元から無い平穏なんて望んだところでやっぱり無い後編

余りに突然だったので思考が追いつく前に「ええ」と返答してしまい、女性はニコリと笑みを浮かべて隣の席に座ってきた。
最近では染色剤を用いて髪を染める者も多いと聞くが、彼女のそれは恐らく地だろう。染髪特有の色の態とらしさが全く無く、色の変化も日に焼けて出来たものであろう、自然に馴染んでいる。身に付けている服や装飾品も決して派手はないが、よく見ると丁寧に作りこまれた装飾が施されている。絶妙なバランスの上に成り立っている上品さとでも言えば良いのか、彼女を構成する要素に何かを足しても、逆に何かを引いても下品となり果てる。そんな完成された優美さがあった。

「はじめまして、私(わたくし)はマリエル＝フロイスコットと申します。あなたは、確かヒャクメ・・・・・・ヒャクメ＝ヒラツカさんで良かったかしら？」
「ええ、その通りですが・・・・・・失礼ですがどちらかでお会いしましたか？」
「いえ、最初に申しました通り“はじめまして”ですわ」

まあ、件のごとく百目は良くも悪くも協会内では既に有名人となっているので容姿と名前を知られていても不思議ではない。だが、知らない相手に急に名を呼ばれると少し居心地の悪さを感じる。
そんな考えが顔に出ていたのか彼女は百目を見ながら、くすりっと笑みを漏らした。しかし次に「あらっ」と意外そうに小声で呟いた。

「何か？」
「いえ、大した事では。先生もいらした事ですし、詳しくはまた後

ほど」

彼女―――マリエルはそれっきり話す事は無く、前を向きノートの準備をしている。少し引っ掛かる事もあるが百目も大人しく受講の準備をする。

しかし、ふと気になった。先ほどまで嫌と言うほど自分に向けられていたヒソヒソ声や視線を急に感じなくなったのだ。不思議に思い目立たないように回りを見回してみた。すると何故か周囲に座っていた者の殆どが気の抜けたような、もっと言えば虚ろな目で虚空を見ていた。

その突然の変化にぎょっとした百目の気配が面白かったのか、隣のマリエルが再び笑みを漏らした。

講義自体は坦々と進んでいく。講師は既にお爺ちゃんと呼ばれてもおかしくないほどの老境に差し掛かった人物で、その話し方も非常にゆっくりとしており眠気を誘う。

因みに講義は「魔術学概説？」だ。

「・・・・・・となる訳です。えーですから、協会方式で分類する場合、生物の体内に内包されている魔力というのは、二種類に分ける事が出来ます。えー、これが最初に話した随意魔力と不随意魔力ですね。えーこれが・・・・・・」

協会方式の魔術を扱う上で、非常に基本的な事だ。生物の体内には自分で意識的に扱う事の出来る魔力とそうでない魔力が存在する。いわゆる魔術師と呼ばれる者達はこの意識的に扱う事の出来る魔力、

随意魔力を用いて魔術を行使する。この随意魔力の保有量が魔術師になれる者とそうではない者を分けているのだ。
現在ルーン地域で使用されているほとんどの魔術は協会方式を使用している。故にルーン地域で、ましてやアヴァルで魔術を少しでも齧った事のある者ならば知っていて当たり前の事を講義しているのだ。
その為か講義室の学生は半数近くが既に撃沈して突っ伏している。起きている者でも態々ノートを取ろうとする者は居ない。
ただ、百目だけは八ツ島出身と言う事と生来の真面目さも在ってノートに書き取っている。八ツ島で使われる魔術はアヴァルの魔術とは根幹から違い、一つ一つが百目にとって新鮮なのだ。しかし、普段なら嬉々としてノートを取るのだが今は別の事が気になっている。それは当然隣に座っている女性の事だ。マリエルと名乗っていたが、何の目的で百目に近付いてきたのか皆目見当も付かない。それと先ほどからどうもフロイスコットという家名が気になっているのだ。アヴァルに渡る前にどこかで目にしたと思うのだが思い出せなかった。

そんな風に悶々としながらノートを取っている内に講義の終了を告げる鐘が鳴り響き、それを合図に講義室内が賑やかになる。講師も慣れたもので、特に終了を告げるでもなく荷物をまとめて退出していく。学生も背伸びをしたり、仲の良い者同士で昼食を食べに行く等、次々と退出していく。
「さて、少しお付き合い頂けませんか？それと協会では同期なのですから、もっと気楽に話してくださって結構ですわよ」

マリエルの申し出に百目は少しの間考えるが、元々畏まったのが肌に合わない身としては願ったり叶ったりだったのでその提案に従うことにした。

「良いが、用事が在るから出来るだけ手短に頼む」

「ええ、そんなに時間は掛かりませんわ。とにかく移動しましょう」

マリエルに引き連れられて講義棟を出ると、段々と人気の無い場所へ向かっている。まだ協会内に詳しくない百目はこの先に何があるのか解らない。自分がどこに連れて行かれるのか解らない事の不安も含めて、沈黙が気まずかったので気になっていた事で話を振ってみる。

「そういえば、講義が始まる前に何か呟いてたけどあれは何だったんだ？」

「ああ、あれはあなたが“魅了”に掛からなかったから」

「魅了？・・・・・・でもあの時特に魔術が発動した気配は無かったが？」

「それはそうですわ。だって、私の魅了は魔術じゃなくて魔眼ですもの」

百目はギョッとする。

「あなた――――ヒラツカは本当に顔に出やすいですわね」

何が楽しいのかコロコロと笑うマリエルだが、百目はかなり動揺していた。

「魅了の魔眼、フロイスコット・・・・・・、まさかあのフロイス

コット家か！」
「“あの”がどれをさすのか解らないですけれど、たぶんヒラツカの想像通りですわ」
百目は今はっきりと思い出した。アヴァルに渡る前に読んだ書物によればフロイスコット家はアヴァルに住む吸血鬼の一族だ。しかもかなり古くから存在する旧家で、吸血鬼の氏族の間でも上級に類するらしい。
ただフロイスコット家は他の吸血鬼とは少々毛色が違う。普通余り詳しくない人間だと吸血鬼に血を吸われると、同じ吸血鬼になると思われがちだが、全部の吸血鬼がそうなのではない。基本的に力の弱い吸血鬼ほど吸血による繁殖を行う。逆に強大な力を有する吸血鬼は吸血による繁殖能力が無いのだ。故に、吸血鬼で上級とされている氏族は吸血では増えない。
フロイスコット家も吸血による繁殖能力は無い。しかし、能力が高いかと言われると疑問が残るのだ。確かに人間と比べてしまえば吸血鬼は須らく“化け物”なのだが、フロイスコット家は吸血では繁殖出来ないにも関わらず、基本的な能力が低級の吸血鬼と同じ位なのだ。故に吸血鬼の間では長い間嘲笑の対象とされてきたらしい。
更にフロイスコット家を吸血鬼の間で異端とさせているのは、彼らの持つ技術だ。代々の当主達は自分達が弱い事を自覚した上である物に目を付けた。それは人間が持つ魔術と剣術だった。
本来ルーン地域の吸血鬼は武器を使う事を嫌う。自分達は強大な能力を有しているのだから脆弱な人間如きが悪足掻きに使う道具を使う事は恥、とまで考えるのだ。
フロイスコット家はそんな考えを捨て、周りからの侮辱に耐え、遂には磨き上げたその力で周囲を黙らせるまでに至ったという。
「それなりに、力を込めたのに魅了が効いていないから少し驚きましたわ」

「何て危ない事を、・・・・・・って周りの連中大丈夫かよ！？」
「そこまで強くしていないから、もう解けてますわよ」

それにしたって、百目からしたら胆の冷える話だ。もしかしたら自分も骨抜きにされていたかもしれないのだ。
そんな事を考えているところにマリエルが不意に話を振ってくる。

「ヒラツカは本当に人間？かなりの抵抗力を持っている様だけど」
「っ・・・人間だ。間違いなくな」

どこか探るように聞いてくるマリエルに対して百目は一瞬息が詰まり即答する事が出来なかった。その反応にマリエルは少し目を細めただけで特に突っ込んでこなかった。
それっきり、二人は話さず粛々と歩いていく。２分ほど歩いた所だろうか、マリエルは一つの建物に入っていく。百目もそれに付いて中に入っていくとそこはどうも体育館の様だった。
凡そ２００×４００m．ほどの広さだろうか。天井も高く、二階にはちゃんと観覧席まである。
しかし、何故自分がこんな所に連れて来られたのか解らず、疑問に思いマリエル訪ねようと振り返った瞬間、向こうから何か長い物が放られた。思わずそれを掴み取るとそれは剣だった。ルーンでは一般的な長剣だ。
マリエルの意図が解らず困惑しているところへ、彼女が説明してくる。

「私と手合わせして下さい」
「はっ！？いきなり何だ！？」
「ヒラツカはかなり心得が在りますわね。普段の体の運用を見れば解ります。・・・何よりあの、ヒメシロさんだったかしら？常に彼女を護る様に、それこそまるで護衛の様に位置を取っていますわよ

ね？」

百目は絶句した。まさか普段からそこまで見られており、かつそこまで見抜かれているとは思いもしなかった。本来ならそこまで百目を見ている目があれば感付けた筈なのだが、いかんせんここ最近は常に周囲から注目されていたので感覚が麻痺していたのだ。

「私は見てみたい、八ツ島の剣術を。立ち合ってみたい、まだ見ぬ強さと。それがフロイスコット家に産まれた者の性」

マリエルはこちらの都合を気にした風も無く滔々と歌うように口上を述べる。これを聞く限りどうもフロイスコット家は相当な尚武の家系らしい。百目としては堪ったものではない。だがそれと同時に経験上この手の相手は武術を神聖視しているので逃げたら逃げたで厄介ごとに発展する事を百目は学んでいた。

「手合わせをすれば帰って良いのか？」

「ええ」

諦めた様に仕方ないと百目は剣を構える。そもそも知り合ったばかりの相手にのこのこ付いていく自分が愚かなのだ。

それを見てマリエルも嬉しそうに剣を構える。かなり堂に入った構えで隙が少ない。それに比べると百目の構えはどこか素人臭い。どこか剣身も安定せずふらふらしている。

マリエルは気になった。幾ら何でも構えが素人過ぎる。剣身はふらふらと安定していないし、隙が無い部分を探す方が難しい。しかし、直ぐに心の中で笑みを浮かべた。態と隙だらけにして此方を困惑させ、自らの攻め手を読ませない様にしていると勝手に解釈したのだ。

一瞬の静寂の後、マリエルが踏み込んできた。一撃目は刺突だ。

百目の鳩尾目掛けて剣を突き出す。百目は慌ててそれを弾こうと剣を振り下ろした。
　するとマリエルはそのまま手首を返すと百目の剣を絡め取る様にして弾き上げた。剣は持ち主を離れて放物線を描いて百目の背後にがしゃん、と落ちた。
　百目としては「まあ、当然か」位にしか思っていなかったのだが改めて正面を見て驚いた。マリエルが顔を真っ赤にしてこちら睨んでいる。

「・・・・・・ますの」
「へっ？」
「馬鹿にしていますの！！！！」

　大音声が室内に響き渡った。目を見開く百目を他所にマリエルは喚き散らす。

「そりゃ、確かにいきなり手合わせをってのも失礼だと思ったわよ、道中聞いちゃいけない事を聞いちゃったわよ。でも、それでも真剣勝負に手を抜くなんて、侮辱だわ！！！！」

　僅かに涙の零れるマリエルを見ながら、百目は呆然とするしかない。というか「口調が変わっているが、こちらが地なのだろうか？」などと埒外な事を考えるぐらいに混乱していた。自分は決して「手を抜いていない」し、まさかそれで相手が泣き出すとは思っても見なかったのだ。
　それを弁明しようとしても、マリエルからは「嘘だ！！」と返される始末。さてどうしたものかと頭を悩ませる。

「だって、あなたを見ていたら強いって解るもん。私（わたし）はまだ修行中だから細かくは解らないけど、少なくともこんなに弱い筈が無いも

ん」

段々と言葉が幼時退行している。「そこまで悔しかったのだろうか？」と百目は遂にすんすんと啜り泣きながら顔を両手で覆っているマリエルを見た。

（・・・・・・というか精神面弱すぎだろ）

更に泣かれると厄介なので言葉には出さない。今この状態ですら自分に非は無い筈なのに潰れそうなほどの罪悪感が圧し掛かって来る。

そして、同時に百目は納得していた。このお嬢様は見切りきっていない。百目の強さを読む事は出来ても、百目が何を得物とするかが解っていない。

「すまない」

そんな考えが頭を巡りながら百目は頭を下げていた。その行動にマリエルはとりあえず啜り泣きを止めた。

「確かにさっきのは俺の全力じゃなかった。ただフロイスコットを侮辱する気なんて微塵も無かった」

「じゃあ、なんで？」

「あ～・・・・・・」

マリエルのどこか恨みがましく聞こえる問い掛けに言いよどむが、正直に話す事にした。

「俺、刀剣の扱いは出来ないんだ。師匠（せんせい）から三日でダメだし食らった、「お主は才能がこれっぽっちも無いのう」って」

百目のまさかの告白にマリエルは驚く。

「じゃ、じゃあ、本当の武器は何なの？槍？斧？」

「いや、これ」

そう言って百目は自分の拳を握ったり開いたりする。

「手って・・・そんなので戦えるの？」

マリエルは不思議そうにしているがこれは文化の違いだ。アヴァルでは武術としての徒手空拳が非常にマイナーなのだ。無論剣術等に付随する形でも体術は伝えられているが、それはあくまで武器在っての話になる。

理由は簡単、単純に武器が有ったほうが強いからだ。だからアヴァルでは、態々武器を持たず徒手空拳で戦おうとするのはそれを突き詰めて鍛え上げたよほどの変わり者ぐらいしか居ない。

「ああ、その方が良い。だから今度こそ全力で立ち合う事を約束する」

「！？」

瞬間、マリエルは弾かれたように立ち上がって剣を構えた。少しでも気を抜けばその間に一撃を受けて弾け飛ぶ自分を幻視してしまった。

百目は特に構えている訳ではない。足を肩幅に開いて、肘と膝を軽く曲げているだけだ。一試合目と同じく隙だらけの格好。

だが、マリエルは攻められないでいた。百目はただ立っているだけなのに凄まじいプレッシャーを掛けられる。先程から冷や汗が止まらない。そんなマリエルの迷いを読み取ったように今度は百目が攻めてきた。

気が付けば既に目の前まで迫った百目の拳が見える。慌ててそれを受けようと剣の身で受けようとする。先程とは真逆の配置だ。
それを見ても百目は臆する事無く剣身に自分の拳を叩き込む。マリエルは剣で受けた瞬間手が弾き飛ばされそうなほど痺れを受けた。ただ重い物を受けただけではなく、まるで電気を流されたような・・・・・。
そしてその次に我が目を疑った。何と剣が砕けたのだ。自分が握っている部分を除いて刀身は粉々になっている。

「っ！！！！」

驚いたがそれ以上に危険を感じて、盛大に飛びのいた。自分の頭の有った位置を百目の拳が通り過ぎ、僅かに回避が間に合わなかったのか髪が数本切られて舞った。

（さっきとはぜんぜん違う！何よりあの技は一体？・・・・・・駄目だ、考えるのは後、先ずは剣を！！）

マリエルは森を思い浮かべる。ただし、そこに生えているのは決して樹木などではない。枝葉は無く、どこまでも武骨で鈍色を放つそれら。
刃金だ。古今東西、形状問わず様々な刀剣が刺さっている。
剣が森を成している。
その異形の森に呼びかける。

「レコーウス」

静かに呼ぶと既に手の中に一振りの剣が納まっている。幅広の両刃剣だ。その光景に、百目は「ほう」とだけ呟いた。
だが、それだけで百目は再びマリエルに打ちかかる。マリエルは

また剣で受けるが百目は先程度同じ技で剣を砕いた。剣はまるでガラスが砕けるような高い音を放って、文字通り跡形も無く消え去った。
疑問も在るがそれより先に追撃を掛けようとして今度は百目が驚く番だった。

「シャルバラ！！」

マリエルがそう叫んだかと思うと空いた手の方に今度は片刃の細身な刀身が既に握られていた。それを容赦なく百目目掛けて振り下ろす。
堪らず百目は回避し距離をとる。

「・・・・・・もしかして、それがあの名高い「剣の森」か？」
「そうよ。まだ完全に発動させてるわけじゃないけど」

剣の森。
これがフロイスコット家をフロイスコット家足らしめている魔術であり、しかも一族しか使えない為に固有魔術と呼ばれている物だ。
異界に封印した刀剣本体から、精巧なコピーを現世に召喚する。代々の当主が剣術を研鑽すると同時に時間を掛けて生み出した一族のシンボルだ。

「さっきも聞いたけどあなたこそ本当に人間なの？剣をあんな風に砕くなんて聞いた事も無い」
「人間だよ。そしてこの技は魔術でも能力でもないただの武術だ。一応流派の名前は六枝流（ろくしりゅう）という」
「ロクシリュウ？」

マリエルは不思議そうに繰り返す。当然だろう、何せ八ツ島の武

術などアヴァルには何も知られていないに等しく、流派を言った所で解る訳が無い。更に加えて言えば、六枝流は八ツ島でも非常にマイナーだ。何せ百目を含めても使い手は5人も居ない。
六枝流に関してはまたいずれ語る機会があるとして。

「さて、次で決着を付けようか」
「くっ！？」

百目の雰囲気がまた急変する。
床を踏み抜かんばかりの踏み込み音と共に百目が突っ込んでくる。更に速い踏み込みにマリエルは戦慄した。何せ対処が思いつかないのだ。剣を振るえばまたあの技で破壊されると思うとどうすれば決定打が打ち込めるのか解らない。
そうこうする内に百目が目の前に迫っているので遮二無二剣を振るう。すると百目は剣身を横から右の掌で軽く触る。するとまた剣が粉々になった。

六枝流絶技が三手「蝕砕（しょくさい）」

相手の武器・防具を素手で破壊する為の技だ。

（くっ・・・次を、次の剣を！！）

召喚したと同時に百目目掛けて斬り付ける。といっても実際に斬る訳にはいかないので剣を伏せて空いた肩を狙い叩きつける。それでも当たれば骨ぐらいは簡単に砕ける威力だ。マリエルは百目がその一撃を避けると思っていた。しかし、百目は実際には微動だにせずそれをそのまま受けた。
驚愕は二重の意味でやって来た。初めは避けられたであろう一撃を百目が受けた事。次にその一撃が当たった瞬間に体中の力が消失：

した。

六枝流絶技の二手「水鏡（みずかがみ）」

剣を叩きつける際に込めた力も、その反動を抑える力も全てが急に無くなった為、動く事が出来ない。

一瞬の事とは言え、それが命取りとなった。何をされたのか訳が解らず、体に力を込め直した時には何処に一撃を入れられたのか解らない内に視界が暗転し、意識を刈り取られていた。

はっ、とマリエルは気が付き周りを見ると百目が傍に座っていた。気絶していた時間は2分ほどだった。

気が付いたと同時に負けた実感と悔しさが沸いてくるがそれを押し込めて百目に頭を下げる。

「ありがとうございました」

マリエルが剣術を始めて父から最初に習ったのは戦った相手対する敬意だった。そんな習いからマリエルは礼を告げるが、百目もまた同じ様に返してきた。

「こちらこそ、半年近く誰とも立ち合ってなかったから良い稽古になった」

「あのレベルで、稽古なの？本気を出したヒラツカとはやり合いたくないわね」

百目はその言葉に思わず苦笑する。

「ああそれと、俺の事は百目と呼んでくれ。平塚で呼ばれているとどうも落ち着かん」

「ええ！！な、名前で呼んでいいの！？」

「？問題ないぞ」

マリエルはどこか照れた様に、顔を赤くしてもじもじしているがそれに百目は気付かない。気が付く訳が無い。体を動かした後だから熱が取れてないんだな、位にしか思っていないし、そうでなければ百目ではない。

「ヒャ、ヒャ・・・ヒャクメ」

そのまま消え入りそうな声だったが、百目はそれに「応！」と嬉しそうに答える。それを見てマリエルの顔は更に赤みを増すのだが、それはさて置き。

「じゃ、じゃあ、私も名前で呼んで？」

「ああ、これからもよろしくマリエル」

何故かそこでマリエルが小さくガッツポーズをしたのを不思議に思った百目だったが、そこでようやく沙綺の事を思い出し、再度マリエルに礼を告げて走り帰った。

最後まで顔を赤くしながらマリエルは百目の後姿を見送っていたが当然のごとく百目はそれに微塵も気が付かなかった。

日が傾きかけていたが、かなり急いだおかげか協会から7分ほどでアパートに到着した百目は、そのまま沙綺の部屋へと向かう。玄関から部屋へと繋がる扉の所で、一旦止まりノックをして声を掛けるが返事が無い。それを確認してから部屋の中に入ると沙綺は眠っていた。

大分落ち着いたのか寝息も落ち着き、顔色も良くなっている。一応熱を確認しようと百目が額に手を触れた時に丁度、沙綺が目を覚ました。

「・・・・・・おかえり」

「ただいま。具合はだいぶ良いみたいだな？」

「うん。頭が少しくらくらするぐらいかな」

百目は安心した様に「そうか」と笑みをこぼし、夕食の準備を始めた。メニューは風邪の時の定番、お粥だ。

半時間ばかり水に浸けた米を沙綺が食べ易い様に七分粥にし、それに味噌で薄く味を付けて作る。これが平塚流で百目も幼い頃に良く作ってもらった記憶が在る。今回はそれに溶き卵を入れトロトロに煮て、最後に細かく刻んだ葱を掛ければ完成だ。

因みに米も味噌も、探せば何でも在ると喧伝する王都セレスティアの裏町の闇商店街を探したら、本当に見つかった。しかもどちらも百目と沙綺の地元、八ツ島の栄（さかえ）が産地と表示されていたのには流石に二人とも驚いていた。

それはさて置き、二人でお粥を食べ終わった後、沙綺は暫く雑談をしていたが次第にうつらうつらしだした。

「眠いんだろ？無理はせずに寝ておけ」

「うううう、そうする。・・・・・・・・・・・・・・・布団は戸棚の中だから使って」

そう言ったきりぱたりと寝落ちる。

（・・・・・・それは暗に、ここに泊まっていけと言う事か。まあ、もともとその算段も在ったから良いか）

やれやれと思いながら、自分用の布団を敷く。まだ時間にして20時を過ぎた位だが、沙綺が寝てしまったので明るくしておくのも気が引ける。

結局そのまま何時もより2時間も早く就寝し、夜中に特段沙綺に起こされる事も無かったのでそのまま一日を終えた。

百目は翌朝何時もより早くに目が覚めた。昨日早くに寝た為だろう、まだ朝日すら昇っていない。沙綺の様子を見ようとベッドに目を向けるが既にそこに居なかった。「はて？」と思ったが、浴室から水音がするので恐らく体を流しているのだろう。それならばと百目は昨日のお粥に火を入れた。一日経ったお粥は水を吸ってぼてぼてとしているが、それはそれで一つ乙である。

「いただきます」

「フン、・・・・・・いただきます」

何故か不機嫌な沙綺の様子に百目は大人しくしているしかない。
（何で、沙綺の奴こんなに不機嫌なんだろう？何かやったっけ？）
（この男は！この男は！！！同じ部屋で寝ていながら手を出すどころか、朝まで熟睡ってどういう了見よ！？しかも朝、直ぐ隣で風呂に入っているのにのほほんと粥なんて温めて、私は粥以下か！！！！！）

唸らんばかりに顔を歪め、お粥を匙で滅多刺しにする沙綺に流石に百目も危機感を覚える。それと同時に沙綺の行動から自分なりに解釈を加え、機嫌を取ろうと試みた。

「・・・やっぱり、さらさらのお粥が良かったか？」
「喧しい！！！」

何処までも噛み合わない二人である。
そんな朝の一幕もありながら、二人は協会へ行く準備を進める。そんな中急に百目が沙綺を呼んだ。まだ機嫌の直らない沙綺が無言で、振り向くと眼前に百目の顔があり息が詰まった。そのまま百目は自分の額と沙綺の額を合わせて熱を測る。

「もう、大丈夫そうだな。でも病み上がりには変わりないんだから無理はするなよ？」

沙綺は口をぱくぱくとさせて何か言おうとしているが、百目はそれで安心したのかさっさと部屋から出て行こうとする。
軽く溜息を吐いた沙綺はそれに付いていく。今更この朴念仁に過度の期待を掛けても仕方ない事は沙綺が一番わかっている心算だ。どうせこのアヴァルでは百目は浮いてしまって、ライバルなど元よ

り存在しない。慌てる必要は無いのだ。それよりは今の自分に対する心配と額同士とはいえ百目とくっ付けた事に対する嬉しさを噛み締めようと頭を切り替えた。

何故かにこにことしながら共に歩く沙綺を心底不思議に思いながら百目は協会へと向かう。角を曲がり大通りに出た所で昨日と同じくガルシアとレックスが合流する。ガルシアは純粋に沙綺を心配し、レックスは下心丸出しで言い寄っては素気無く袖にされている。

何時も通りわいわい騒ぎながら協会まで来ると門の前で百目は見知った相手を見つけた。相手も同時に見付けたらしく、小走りでこちらにやってくる。その表情は昨日見せていた微笑等ではなく、満面の笑みを浮かべていた。

「おはよわっと！！」

百目が挨拶をしようと声を掛けている最中でその相手――――マリエルが飛び付いてくる。

「ヒャクメ、おはよう！！」

百目に抱き着いたままそう挨拶するマリエルの笑顔は本当に嬉しそうで、昨日までの取り澄ました様子は一切無い。

百目はいきなりの事に慌てるが、何とかおはようとだけ返す。

しかし、マリエルの追撃の手は一切緩められない。

「ねぇねぇヒャクメ、今度の週末は暇？」

「へ？」
「むぅ、だから今度のお休みに何か用事は有るの？」
「いや、・・・いや何も無い筈だけど？」
「じゃあ、今度のお休みに私の実家に遊びに来ない？お父様に紹介するから！！」

最後の発言にガルシアは自分の事でも無いのに恥ずかしそうに、レックスは「いいぞ、もっとや・・・えっ？なんすぐっはあああああ」と沈められた。
その叫び声に百目は振り返る。そこにはさっきまでの機嫌の良さなど微塵も無い沙綺が自分達を射殺さんばかりの眼光で睨んでいる。彼女の右手には泡を吹くレックスの顔面が握られていたが、それをぞんざいに放り捨てる。

「・・・・・・百目」

ただ名前を呼ばれただけなのに、腹の中の色んな物がぺっちゃんこにされたかの様だ。気の弱い人間ならそれだけで心の臓が止まりそうな怒気を孕んだ声に、百目は辛うじて「はい」とだけ掠れた声で返した。実際ガルシアは少し中てられたのか顔を青くして震えている。
一方マリエルはそれを面白く無さそうに見ながら、百目から離れた。

「貴様、誰だ？」
「あら、人に名前を尋ねるなら自分から言ったら？まあ貴女の事は知っているから、どうでも良いけど。私の名前はマリエル＝フロイスコットよ」
「ほう。ところでアヴァルでは朝の挨拶に態々相手に抱きつくのか？それとも貴様が痴女なのか？そうか痴女なんだな」

「なっ！？あなた言うに事欠いてフロイスコット家に向かって痴女ですって！！！」
「家名に頼るとは底の浅い女だな！！！」
「極東の田舎者の分際でっ！！」

二人の周りでそれぞれ魔力が渦巻く。沙綺は何時の間にか角が生えており、マリエルも何時の間にか、剣を召喚していた。確かシャルバラと呼ばれていた剣だ。
段々と周囲の魔力偏在値が高まり、飽和状態になったところで変化が生じた。沙綺の霊格に中てられた飽和魔力は炎にマリエルは雷に、それぞれが各々の周囲で渦巻く。
そしてその瞬間、まるでそれが合図であった様に二人が激突する。既に二人とも完全戦闘態勢だ。沙綺は完全に鬼へと変化し、マリエルは背後の魔術陣の中に（恐らくこれが完全に起動した「剣の森」だろう）幾本もの突き立てられた剣を召喚している。時折マリエルの「次！！」と言う声に合わせて争いの渦中へ剣が飛び込んでいく。

「私がヒャクメと何をしようと勝手でしょ！！」
「うるさい！！あいつは私のだ！！！」
「うっわ、何その自分勝手な言い草。ヒャクメも可哀相ね！！」
「喧しい！！！」

喧々囂々と続く、彼女らの闘争は既に多くの注目を集めている。そろそろ協会の教授陣が動きそうな気もするし大事にはしたくないのだが、最早百目にはこの事態を止める術は無く、ただ傍観するしかなかった。

「可哀相だな？」

何時の間にか復活したレックスは百目の肩に手を置きながら、哀

れみとも、からかいとも取れる言葉を投げ、それに対して百目は深い溜息と力無く頭(かぶり)を振る事しか出来なかった。

因みにフロイスコット家に於いて家名ではなく名前で異性同士が呼び合う様に申し出る事が婚約の口約束に相当するのだと百目が知るのは、もっと後になっての事だった。

第４話　元から無い平穏なんて望んだところでやっぱり無い後編（後書き）

九ヶ月ほどご無沙汰をしていました、陸要です。
ようやく後編を投稿する事が出来ました。これからはもう少しスムーズに更新出来るようにがんばりたいと思います。
次回はとりあえず百目と沙綺の過去編を予定しています。

本作を読まれてのご意見・ご感想を是非お聞かせ下さい。それを励みにこれからも精進していきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5184k/

ろいやる！！

2011年10月6日22時25分発行